

〈資料〉

書評 當眞嗣一
『シリーズ遺跡を学ぶ 琉球王国の象徴 首里城』

山本正昭

平成の時代に復元された首里城正殿並びに北殿、南殿などの周辺施設が2019年10月31日に焼失したことは未だ記憶に新しい。この出来事は日常生活の中で当たり前とされていた沖縄を象徴する風景に対して、ひとつの疑問を投げかけた。それは、喪失した際にどのように失ったものと相対するののかという疑問である。言うまでもなく首里城に関心を持っている方々にとって、琴線に触れる問い掛けと言える。この問いにおいて答えを求めていこうとすると、誰しものが首里城とはどのようなものだったのか、その基本情報を得ようと試みる。そこで文献を検索してみると、首里城に関連する一般書籍や調査報告書が意外と膨大な数に上ることに気付かされる。それらからどれを選択して、どのような情報を得るのかについて考えるだけでもかなりの時間と労力を傾注することとなる。

本書は数ある首里城関連書籍の中でも、一般的で分かりやすい用語が多用され、写真並びに図に多くの紙数が割かれていることから、首里城に興味を持った人が読み込める内容となっている。また、考古学による発掘調査の成果についても要点を押さえて解説を行っていることから、遺跡としての首里城がどのような文化財的な意味を持っているのかについても容易に理解できる内容となっている。やや乱暴ではあるが本書を端的に評価すると、首里城という存在について今一度、考える大きな材料を提供してくれる教材本として位置付けることができる。

首里城としての価値を問う際には『首里城跡』として2000年に世界遺産「琉球王国のグスクおよび関連遺産群」の一つとしてユネスコに登録された点は無視することはできない。この世界遺産登録の意味について分かり易く説明すると、「琉球王国のグスクおよび関連遺産群」として一括化された沖縄県内遺跡の文化財的価値がユネスコ内の世界遺産登録諮問機関である「国際記念物遺跡会議」、通称イコモスから認定されたこと、加えてそれらが「顕著な普遍的価値」を有したことが世界的に認められたことを意味する。更に首里城は14世紀後半に成立した琉球王国の実態を把握するための遺跡として、世界遺産登録前からの長年にわたる発掘調査が行われ、登録後の2000年代においても新たな発掘調査成果が出され続けている遺跡であるとも言える。

世界遺産に登録されるまで、著者自身が携わった首里城跡の発掘調査についての経緯や発掘時のエピソード、そして世界遺産登録後における発掘調査の成果を一括で本書では簡潔にまとめられている。それらを読み込むことによって首里城は琉球王国の歴史を考える上で等閑視できない存在であることを改めて気付かされる。遺跡としての側面で切り込んだ時の首里城跡はどのような点で特徴的であるのか、そして残されている課題は何か、首

里城跡がどのような形でこれまで調査されてきたのか、首里城跡に関する基本情報が紙数の許す限り本書には盛り込まれている。そして著者は、「廃墟となった城」として遺跡の『真实性』がイコモスによって評価されたと本書の最後で触れているが、これは首里城跡の発掘調査に携わってきたことに対する著者の苦勞が報われたようにも感じることができるのは、評者が深読みしすぎたことによるものであろうか。

以上のように首里城は遺跡としての評価で世界遺産に登録されていることから、地表面の建物が今回の火災によって失われたとしても、世界遺産としての価値は損なわれないことは十分に理解が及ぶ。しかし、遺跡として地下に残る遺構さえ保全できれば良いかと言えば、これはまた話は違ってくる。

首里城は1945年、沖縄戦によって壊滅的な被害に遭ったことにより、地上からほとんどその姿を消すこととなった。その5年後には琉球政府によって琉球大学の校舎群が首里城跡に建造されたことにより、首里城が占地していた丘陵全体の景観が大きく変容してしまう。それは14世紀に首里で最も高い丘陵にグスクが築かれて以来、沖縄の象徴としての景観が失われてしまったことを意味し、同時に長い期間慣れ親しんだ風景とは全く異なる風景の出現を目の当たりにしたことで、多くの人々は従来までの沖縄とは異なる時の流れに入っていくことを視覚的に認識するに至る。しかし、1974年に歓会門から久慶門にかけての城壁と門楼の建物が復元されたことを皮切りに、1992年に正殿や北殿、南殿、奉神門、広福門、漏刻門、瑞泉門といった建物群が再び甦ったことが大きな契機となって、かつての景観が平成の時代を通して段階的に復元されていくこととなる。それに伴って、沖縄における象徴としての首里城が再度、多くの人々の心の内に根付いていた。このことは冒頭に触れた、首里城が火災に遭った直後に周辺住民の反応から評者は否応なく感じることができた。

本書の中で「首里城の復元なくしては沖縄の戦後は終わらない」といった一節が引用されていたが、首里城は何も琉球王国が存在していた王城としての首里城に限らない。琉球処分以降の国王が不在となった明治、大正の時代、そしてその姿をほとんど消していた戦後における昭和の時代、復元が成った平成の時代とそれぞれの時代において首里城はその存在意義を有し続けていた。また、首里城は各時代の人々に対してその存在意義を問い続けていたと言える。つまり、遺跡としての文化財的価値を素地にして、首里城における全ての存在が首里城に関わってきた人々の時代相を有形化した象徴物であると言っても過言ではない。だからこそ、世界遺産として登録されている対象のみが首里城としての唯一無二の価値として捉えることは首里城を理解していく上で適切ではないと換言することができる。と同時に、今回の首里城焼失の件は文化財が現代とつながりを持ちながら存在していることに対して、評者は意識を強く向けていく切っ掛けとなった。

令和という新たな時代に入って以降も首里城再建について様々なところで議論が行われている。また、多くの人々が首里城再建に向けて募金並びに募金活動を行ってきている。このような報道を耳にするたびに、首里城再建に対する熱意とそれを形にしようとしてい

る行動様式が今の時代に見る首里城の「姿」として捉えることができる。首里城に対して新たな存在意義を見出そうとしている先の現状は、首里城がいかなる姿になろうとも、首里城としての存在を今後も問い続けていくものと思われる。そのような文脈で捕捉した時、首里城の意義を時代ごとに紹介している本書は研究者のみならず首里城について興味を持った多くの方にとって、いみじくも必読の一冊と言える。